特に注目すべき点は、血縁ネットワークの浸透と拡散である。すでに、ベジャートと近親者がバアス党初期に軍の主要ポストをいかに独占したかについては述べたが、部族、つまりスンナ派地域の出身者が歴代徴用されてきた結果、同地域出身の新世代の司令官が最高レベルにまで昇進し、さらにその下に同郷者の予備軍が幾重にも待機している。また軍のバアス党化は、党および血縁ネットワークをともに並行的に拡大する結果をもたらした。イラン・イラク戦争時の前例のない軍の肥大化がベジャートとその部族同盟の出身者の比率を低下させただろうが、軍は湾岸戦争後再び1990年以前の規模に縮小され、その結果部族集団の相対的勢力が増大した。この集団は、全将校の10%から15%に相当する3000人から4000人の将校を占めている。

ベジャートは、ドゥーリ、ラーウィー、ティクリーティを貴族の伯爵、卿、爵といった位置として認識している、ともいえよう。ここにあげた三つの表には、バアス党配下の国防相 (表6)、湾岸戦争前夜の司令官の一部 (表7)、1995～96年の軍の主要部隊司令官のほぼ完全なリスト (表8) が示されている。表6では、8人の国防相の内の6人がベジャート出身、3人がその分家であるニダー出身 (サッダーム・フセインの母方の従兄弟)、2人がマジード (大統領の家族)、1人がジュブーリ、1人がモースル出身者、最後の1人がマジード一族の親族たるアルブ・スルターンの出身である。ベジャート出身の閣僚は、このポストを29年間のうち26年間占めていた。表7の無作為に選んだ12人の軍団司令官については、ベジャートがその三分の一を構成し、直近の部族同盟を加えると三分の二を占めていること、逆にモースルとバグダードの出身者を合わせて三分の一にしかならないことが明らかになっている。表8は現状を示すもので、1995～96年の21人の司令官集団を示している。正確に出自が規定できたのは13人に限られているが、この狭い範囲内で9人がベジャートとその同盟の出身、 2人がバグダード出身、1人がモースル出身である。つまりベジャートのその同盟の出身者の割合は50%になる。またこれらの将校は大統領よりはるかに若い新世代の司令官であり、部族的な年長者への従属姿勢が機能している。ほとんどがイラン・イラク戦争中には階梯的に二位の地位に位置していたのが、第一線司令官の更迭の後初めて昇進したものであり、この速い昇進は、新世代の将校を魅了するものである。

表6　　歴代国防相（1963～96年）

名前	職歴	その他職歴	出身部族	在任期間 (年)	備考
ｱﾌﾏﾄﾞ・ﾊｻﾝ・ﾊﾞｸﾙ	退役将校	大統領	ベジャート	6	1982年死亡
ﾊﾏﾄﾞ・ｼﾊｰﾌﾞ	将校		ベジャート	4	1973年暗殺
ｱﾄﾞﾅﾝ・ﾊｲﾗｯﾗｰ	将校	党軍事局員	ベジャート	10	1988年死亡
ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ｼｬﾝｼｬﾙ	将校	非バアス党員	モースル	2	1990年解任
ｻﾌﾃﾞｨ・ｼﾞｭﾌﾞｰﾘ	将校		ジュブール	1年以内	1991年解任
ﾌｾｲﾝ・ｶｰﾐﾙ	文民、護衛官	党軍事局長	ベジャート	数ヶ月	1996年殺害
ｱﾘ・ﾊｻﾝ・ﾏｼﾞｰﾄﾞ	文民	党軍事局員	ベジャート	5	1995年解任
ｻｰﾋﾞﾄ・ｽﾙﾀｰﾝ	将校	元参謀総長		1	現職

（出所：図1に同じ）

表7　1988～90年中の軍における主要な指揮官(例)

名前	担当軍団	地位	出身地
ﾏﾌﾑｰﾄﾞ・ﾌｧｲｽﾞｨ・ﾊｯｻﾞｱ	第一軍団	軍団長	ベジャート
ｱｰﾐﾙ・ｼｰｱ・ｱﾌﾏﾄﾞ	第二軍団	軍団長	ジュブール
ｶｲｽ・ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙﾗｯｻﾞｰｸ	第三軍団	軍団長	バグダード
ｱｲｭｰﾌﾞ・ﾏﾌﾃﾞｨ・ｻｰﾘﾌ	第四軍団	軍団長	バラド
ﾅｰｽｲﾙ・ｻｲｰﾄﾞ・ｶｳﾌｨｰｸ	第五軍団	軍団長	ベジャート
ｲﾌﾞﾗﾋｰﾑ・ｻｯﾀﾙ・ｱﾝｻｰﾙ	共和国防衛隊	防衛隊長	モースル
ｲﾔｰﾄﾞ・ｱｯﾗｰｳｨ	参謀本部	参謀総長	ラワ(ドゥレイム)
ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙｶｰﾃﾞｨﾙ	参謀本部	参謀次長	モースル
ｽﾙﾀｰﾝ・ﾊｰｼﾑ・ｱﾌﾏﾄﾞ	参謀本部	作戦担当参謀次長	ベジャート(シルガート)
ｽﾞｲｱ・ｼﾞｬﾏｰﾙ・ｳｯﾃﾞｨｰﾝ	参謀本部	参謀次長	モースル

（出所：図1に同じ）

４．軍における分裂

バアス体制の運命は、ある程度この血縁集団とそのネットワークの凝集力、規律、大胆さ、政治的姿勢によって左右されている。しかしこれらのネットワークは指導的立場にある支配エリート同様、少なくとも一枚岩でなく、戦争とその敗北、管理ミス、経済的困難などと無縁ではない。

血縁ネットワークの影響力と力点のおき方が最も少ない南部と北部での反乱、分離は、状況に応じてしばしば繰り返され、散発的な大反乱や崩壊につながる可能性は否定できない。反乱と崩壊は中部地域の共和国防衛隊とは無縁のものであったが、それは共和国防衛隊がベジャートとその部族同盟の手に委ねられているからではなく、破壊的な米国軍の攻撃から守られ面目を失うことがなかったからである。しか

表8　1995～96年の軍における主要な指揮官

担当	名前	出身
第一軍団	M.G.ﾗｱﾄﾞ・ﾏｼﾞｰﾄﾞ・ｱﾙﾅｰｽｲﾘｰ	ベジャート(オウジャ)
第二軍団	M.G.ｶｲｽ・ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙﾗｯｻﾞｰｸ・ｱｱｻﾞﾐ	バグダード
第三軍団	L.G.ｻﾊﾞｰﾊ・ﾇｰﾘ・ｳｼﾞｬｲﾘ	シャンマル
第四軍団	L.G.ﾀｰﾘｸ・ｻｰﾃﾞｨｸ・ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙﾌｾｲﾝ	シーア派
第五軍団	M.G.ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ｱﾀｱｯﾗｰ・ｱﾙﾋｯﾃｨ	ティクリーティ
参謀総長	L.G.ｽﾙﾀｰﾝ・ﾊｰｼﾑ・ｱﾌﾏﾄﾞ	ベジャート(シャルガート)
第一参謀次長	L.G.ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙｶｰﾃﾞｨﾙ・ﾗﾌﾏｰﾝ	バグダード
第二参謀次長	L.G.ｱﾌﾞﾄﾞｳﾙﾜﾋｰﾄﾞ・ｼｬﾅｰﾝ・ｱﾙﾗﾊﾞｰﾄ	クート、シーア派
第三参謀次長	L.G.ｽﾞｲｱ・ｼﾞｬﾏｰﾙ・ｳｯﾃﾞｨｰﾝ	モースル
空軍司令官	M.G.ﾊﾙﾄﾞｳｰﾝ・ﾊｯｸｰﾌﾞ・ﾊﾞｸﾙ	ベジャート
空軍副司令官	M.G.ｱﾙﾜｰﾝ・ﾊｽｰﾝ・ｵﾌﾞｰｼｰ	オブーシー部族
防空司令官	M.G.ﾏﾌﾃﾞｨ・ｻｰﾘﾌ・ﾌｧﾄﾋ	?
防空副司令官	B.G.ﾘﾔｰﾄﾞ・ﾏｼﾞｰﾄﾞ・ｱﾌﾏﾄﾞ	ティクリーティ
共和国防衛隊事務局	M.G.ﾅｰﾐｸ・ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ	?
防衛隊第一軍団	M.G.ｶﾏｰﾙ・ｱﾌﾞﾄﾞｳｯﾗｰ・ﾑｽﾀﾌｧ	ベジャート(オウジャ)
防衛隊第二軍団	M.G.ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ｱﾘ・ｱﾙﾗﾋｰﾋﾞ	?
特別防衛軍団	B.G.ﾊｲﾗｯﾗｰ・ﾜﾊｲﾌﾞ・ｳﾏﾙ	ベジャート
国境軍団	M.G.ｻｲｰﾄﾞ・ﾑﾊﾝﾏﾄﾞ・ﾌｧﾄﾋ	?
軍事顧問	L.G.ｲﾔｰﾄﾞ・ｱｯﾗｰｳｨ	ラワ(ドゥレイム)
参謀本部事務局	L.G.ｱﾗ・ｯﾃﾞｨｰﾝ・ｶｰｽﾞｨﾑ	シーア派?

（出所：図1に同じ）

しこの防衛隊とベジャート部族同盟の同盟関係は亀裂を見せた。1995年6月、バグダードの西35kmにある巨大な軍事基地、アブー・グライブ基地で発生したドゥレイミ部族出身の一部の中級将校が率いた小規模軍事反乱は、最も忠誠心が強い防衛隊の中にも新たな不安定化の傾向があることの証拠である。

事件の経緯を見ると、この反乱は三つの連続して発生した事件に相互に関係があったことがわかる。まず初めに、ドゥレイミ部族出身の高級将校が体制に対する謀略に荷担した疑いで処刑された。近親者が埋葬のため遺体を引き取った時その遺体の姿に衝撃を受け、その結果ラマディで銃撃や衝突が発生したが、それはあたかもドゥレイミと政府の対決のようであった。アンバール州（ドゥレイミ部族の本拠)での民衆反乱の拡大に伴い、多数の反乱者がアブー・グライブ刑務所に集められて弾圧され、投獄された。

従来大統領に忠実であったばかりでなく1991年に大統領を救ったこともあるアンバール出身高級将校だが、彼らの処刑とその血縁者の反乱は、強固なスンナ派－ド